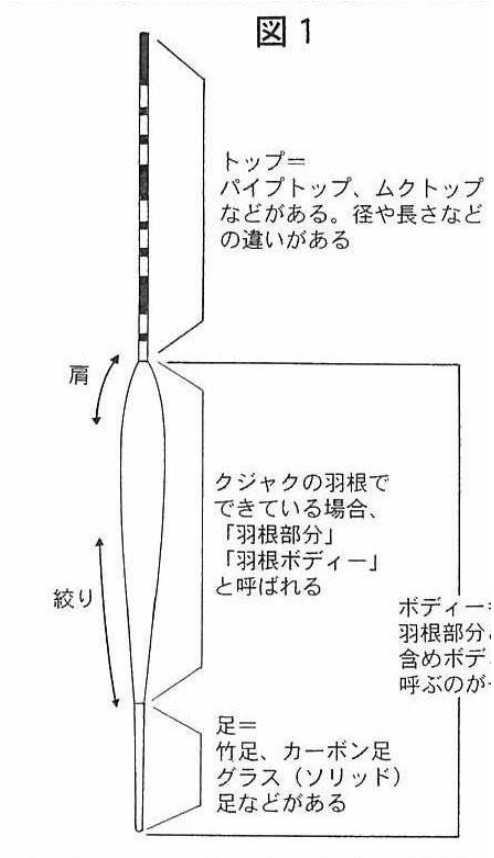
# 第１章　ヘラウキ概論　その１

１．はじめに
あなたはなぜそのウキを使うのですか？
その釣り方で過去にいい釣りをしたから？　それとも明確なコンセプトをお持ちですか？
あるいは、「このウキはどういう時に使えばいいのだろう？」、そういう疑問をお持ちの釣り人は、多いのでなはないでしょうか。
これにはウキ製造メーカー、ウキ製作者側にも問題があると思っている。
釣り具店に売られているウキは数多く、同一作者でも様々なタイプがある。
残念ながら、取り扱い説明書や何釣り用と明示されているウキが少ないのも事実である。
「ウキを知りたい！」へら専科２００５年３月号～２００６年２月号、「ウキをもっと知りたい！」へら専科２０１０年３月号～２０１１年２月号というタイトルで、ヘラウキ製作者側から見た、ヘラウキを解説してきた。
前回の連載から約 10 年の年月が経過し、釣技は発展し、釣り場の状況も変化してきた。
そこで、新たな視点で、ヘラウキ製作者側から見た、ヘラウキ全般について、解説していきたい。

２．ヘラウキの各部パーツの名称について
ベテラン諸氏にとっては、あたり前かもしれないが、改めて、ウキの各パーツについて、おさらいをしておきたい。
ヘラウキは大別して、３つのパーツからなる。（図１参照）
具体的には、①ボディ、②トップ、③足　である。足について、「脚」と表記する場合もあるが、「へら専科」の基準により、ここでは「足」と表記する。




３．ヘラウキのボディ素材の変遷

ヘラウキのボディは、現在、孔雀の羽根とカヤが主流である。

（画像１参照）

私がへら鮒釣りを始めた 1970 年代中頃、ヘラウキの高級品はクジャクの羽根（以下、羽根）であった。中学生の私がよく購入していたのは、桐やバルサで出来たものであった。当時、関西ではカヤはまだ一般的ではなかったように記憶している。
古い「ヘラウキの作り方」を解説した書籍をひっくり返すと、桐、バルサ以外にも発砲スチロール、ガラス管に水素を充填したもの、ゴーチョ（ヤマアラシの毛）など、先人達は様々な素材を試行錯誤してきたことが伺える。
ただ、現在は、バルサ、発砲スチロールが僅かに残るだけで、羽根とカヤ以外は、姿を消してしまった。
羽根とカヤの似ている点は、外皮と中綿で構成されていることである。

（画像２参照）
姿を消していった「バルサ」や「桐」、僅かに残る発砲スチロールとは、この点が大きく異なると考えている。

４．孔雀の羽根とカヤの比較について
孔雀の羽根とカヤを比較してみると、
（１）　孔雀の羽根
長所は、
・カミソリも欠けるほどの硬い表皮による耐久性
・白い羽根の美しさ
短所は、

・加工が難しい、硬く、真円ではない。ウキ作り初心者の方には、形になりにくい。
・天然素材ゆえの選別によるコスト高、近年では鳥獣保護や鳥インフルエンザによる輸入量減少に伴う良材不足、特に 2015 年から、インドでの規制強化に伴い、輸入が難しくなっている。この点については、次号で詳細に解説したいと思う。

（２）　カヤ
長所は、
・柔らかく、真円に近いので、加工がやさしい、ウキ作り初心者の方でも形になる。
・素材が入手しやすい、
・コスト安、羽根に比べてあまり選別する必要がない。
短所は、
・孔雀の羽根に比べると壊れやすい、このため、負荷がかかる部分には、接着剤を多く塗るや糸を巻くなどして補強をする必要がある。
・素材そのものは白くない。といった点がある。

物議をかもしそうなので先に申し上げておくが、私は「羽根とカヤでは素材の優劣は存在せず、ウキを使用する場面によって使い分けるのが理想である。」と考えている。
また、価格の差は素材の価格差とボディ成型の手間が主要因であり、ボディ成型後の工程と手間は、羽根もカヤも変わらない。
あくまで数値的根拠はなく個人の感想でしかないが、盛期でウキがガチャガチャとウキの動きが激しい時には、カヤ材の方がアタリを整理してくれると感じている。逆に厳寒期において、へら鮒のあおりを僅かでもウキに感じたいときには、羽根材のほうが良いと感じている。
ただ、4mm～5mm 径の羽根で 1 本取りに加工できるような良材は、非常に手に入れるのが難しくなっている。
この点から、両ウドンのウキや厳寒期用の浅ダナウドン抜きセットのウキについては、カヤ材を採用している。
次回は、羽根材とカヤ材について、さらに詳しく解説していきたい。